
グリードシティ★残酷の拷問

黒夜風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

グリードシティ★残酷の拷問

【Nコード】

N6034V

【作者名】

黒夜風

【あらすじ】

世界最大の国際組織である国際政府。彼らの求めるのは「絶対正義による平和」。強大な軍事力を有し、その力は世界最大。それに対抗し、滅ぼそうとしたとある組織の女性幹部。だが、彼女は捕えられる。国際政府は本部要塞の位置を割り出そうと彼女を残酷な拷問にかける――！ ※過激な残酷描写を含みます。閲覧にはご注意下さい 夏のホラー2011参加作品

第1話 始の試練

勝利。それを求め、人は戦う

人殺しがいけない

それが通用するのは平和な時代だけ

今は戦争中

そんな常識は通用しない

人は異質なモノに対して憎悪を向ける

違うモノ、自分達と異なるモノ

それは外見だけの話ではない

“考え方”でも言える

自分達とは違う考え方、違う事をする者

それらに対しても向けられる憎悪と嫌悪

向けられた者は平等に扱ってくれない――……

雪の降る真冬の森。乾いた音が鳴り響く。

……と書けば、動物を撃ち、狩りをしているようにも見える。が、しかし、今の時期は冬。動物は冬眠しているはずだ。

そして、撃っているのは装甲服を着た兵士。持っているのはアサルトライフル。動物を狩るのに装甲服は必要ないし、アサルトライフルという立派な軍用の武器もいらない。

では何を撃っているのか？ 彼らは何を狙っているのか？

「ターゲット、駆逐第3部隊の管轄エリアに移動しました」

兵士の1人が無線機で他の部隊の兵士に連絡をつける。すぐに応答が入る。

「了解、駆逐第3部隊のエリアにてターゲットを確認。捕獲に向かう」

遠くのほうから連続した発砲音。さっそく駆逐第3部隊が動き始めたのだろう。

彼らが狙っているのは“人”だった。

「いたぞ！ ターゲットを発見」

「ハア、ハア…… クツ、こんな所にも……！」

「捕らえろ！ 殺してはならん！」

彼らは強大な力を誇る政府軍の特殊部隊員だった。彼らはこれまで何度も“今追っている者”に逃げられてきた。何度も何度も逃げられた。だが今日やっと包囲したのだ。ここで逃がしてならない。絶対に。

「……ネット砲、撃て！」

「イエッサー！」

とある木の下。そこを通ろうとした時、突然上から網が降ってきた。それは追われる者の体にかぶさる。当然、網で身動きが取りにくくなる。

「クツ……！ 何だ、これは！」

突然の事に逃げていた者は声を上げる。その声から女性だろう。

「ターゲット確保しました！ すぐに援軍をお願いします！！」

木の上で待機していた兵士が無線機で連絡を取る。その声は大きかった。長い間、逃げ続けた者をようやく捕まえ、興奮しているのだろう。

彼女が網の中で暴れている間に四方八方から兵士が集まってくる。全員が何かしらの武器を携えて……

「取り押さえろ！」

「クッ、近づくな！」

「全員でかかれ！」

集まってきた兵士全員が彼女に飛び掛る。その手にはスタンロッドが握られていた。

一方、彼女はコンバットナイフを取り出し、素早く網を切ろうとする。だが、その網は太く、頑丈な作りになっている為、全く切れなかった。その間にも兵士達が集まってきて、彼女を蹴り倒し、取り押さえる。

「は、放せッ！」

網の上から取り押さえられ、コンバットナイフを奪われても尚抵抗する彼女。どうしても捕まりたくないからであろう。そうまでして捕まりたくない理由は何なのであるのか？

「ええい！ 大人しくしろ！！」

「あうッ！」

兵士の1人が彼女の首筋を強く叩く。やられたところが悪かったのか彼女は一撃で気絶してしまう。彼女の顔が白い雪の上に倒れた。

「こちら駆逐部隊、ファルガ准将の命令でターゲットを確保しました」

ファルガ准将はこのターゲット確保の最高司令官であった。彼女

を最初に追い始めたのは今から3ヶ月前の事。追い始めたその日から何度逃げられた事か。

しかし、遂に聞くことの出来たこの報告。この報告をどれほど待ち望んだか。この3ヶ月どれほど待った事か。

「……本当か？ 遂に捕まえたのか？」

「はい、本当です。お喜び下さい」

「よ、よし、よくやった。その女を、ターゲットを連行して来い」

無線機から伝えられるファルガ准将の声は僅かに震えていた。恐らく喜びと期待で動揺しているのだろう。

「イエッサー！」

無線機を使って連絡を入れた兵士は元気よく返事をする。彼もまた嬉しいのだろう。逃げ続けたその女性を捕まえれて。

「全部隊に通達。作戦は完了。これより直ちに政府首都グリードシテイに帰還する」

大型の飛行艇に兵士や軍用兵器が詰め込まれていく。その中には気を失ったあの女性の姿もいた……

第2話 針の試練

【政府首都グリードシティ】

国際政府と呼ばれる巨大政府の本拠地である政府首都グリードシティ。その人口は約1500万。政府警備軍の本部、特殊軍の本部を有したその都市はまさに世界最大の都市であった。その巨大都市の中心、軍事総本部のとある建物に彼女は連れて来させられた。

「うっくうっ……」

ターゲットと呼ばれ、政府軍の特殊部隊に追われ続けた彼女は軍事総本部の一室に閉じ込められていた。灰色の石造りの牢屋ではなく、何もない白一色の部屋。何もないと言ってもベッドとトイレだけはあなのだ。

彼女はぼんやりする頭で自らの脚に違和感を感じる。よく見れば脚には手錠のような拘束器具が取り付けられていた。恐らく、走って壁に頭をぶつけて自殺を図らせないようにする為のものである。突然、スライド式の扉が開かれ、数人の兵士と1人の男が入ってくる。その服には色取り取りの勲章のような物。きっと彼は地位の高い人間なのであろう。

「ようこそ、 “ クラスタ ” 。 グリードシティ・軍事総本部へ」

勲章を服につけた男が言う。そのキレイでシワもヒゲもない顔からしてまだ若い男性であることが推測つく。事実、彼は今年で26歳になる。

クラスタ。ターゲットと呼ばれ、政府特殊軍によって捕らえられた彼女の名前であらう。

「私に何の用だ？ 殺すならさっさと殺せ。公開処刑でも何でもしろ！」

「おゝ、死への恐怖がないのか？ それは凄いなア…… もっともお前は貴重な“連合軍”幹部だから簡単には殺さないさ」
「……………」

連合軍——……。1800年もの間、全世界を統治し続けた国際政府。その巨大国家に対して反乱を起こし、戦争を始めた組織の名前だ。クラスタはその組織の上級幹部であった。
多くの優秀な人材や大量の軍用兵器を有した連合軍の勢いは衰えず、戦争は今も全世界に広がっていた。

「どういう意味だ？」

「お前は上級幹部。連合軍の“情報”を多く知っているハズだ」
「……………」

クラスタは理解した。彼は自分の知っている情報が欲しいのだと言う事を。だから簡単には殺さないと決めたのだ。

「なるほど、な。私から情報が欲しいのか。だが、残念だったな。私は絶対に教えない。お前達、腐った政府に教える情報などない！」

クラスタはそう言い放つ。彼女はとある理由から国際政府を憎んでいた。その国際政府を倒す為に連合軍に入ったのだ。

「フッフッフ、そうかいお嬢さん。ならば、力づくで聞き出すまでだ。オイ！」

「イエッサー！」

ファルガ准将の後ろに控えていた2人の兵士が近づき、クラスタの腕を掴む。そして、彼女を蹴り倒し、うつ伏せにさせると、その腕を前に引っ張り出させる。

「……………!? な、何をするつもりだ!?!」

「君が素直じゃないんでねえ…… ちょいと思い知らせてやろうと思っただけ」

「ど、どういう意味だ!?!」

そう言っている間に別の兵士が小さく横に長い長方形の白い箱のような物を持ってくる。その箱の上には手首を固定する拘束具が2つ取り付けられていた。その拘束具にクラスタの両手首をはめて、固定する。

そして、箱を床に取り付け、動かないようにする。

「オ、オイ……………!」

「針をよこせ」

近くの兵士が長い針を取り出し、ファルガ准将に渡す。その細長く銀色の側面が光の反射で光る。それを見たクラスタの心に恐怖心が芽生える。何をされるかは容易に想像出来た。

ファルガ准将はクラスタの右人差し指を掴み、彼女の爪と肉の間に針の先端を近づける。

「質問1、連合軍の本部要塞はどこにある?」

「し、知らないッ!」

「……………そうか、思い出させてやろう」

そう言うとファルガ准将は彼女の爪と皮膚の間に針を刺し込んだ。鋭い痛みがクラスタを襲う。刺し込まれた針は彼女の爪と皮膚の間

に入り込み、爪の奥深くに到達する。それでもファルガ准将は押し込むのを止めず、更に刺し込んでいく。

「クッ！ ウアッ！」

「どうだね？ 思い出したかな？」

針を刺し込まれた指で発生する強烈な苦痛に歪むクラスタの顔。それを間近でニヤニヤしながら見るのはファルガ准将。既に針の先端は人差し指の皮膚を突き破り、出ていた。そこからは赤い液体、クラスタの血が……

「うッグッ！ ご、拷問じゃ、ないのか！ 禁止されてる、ハズじゃないのか！ クウッ！」

「よく知っているじゃないかね、お嬢さん。でも、どうせ君は処刑されるんだ。分かるかね？」

国際政府の定める法律により拷問は禁止されていた。それ故、世間にバレればとんでもない事になるだろう。政府の信頼が揺らぐのは間違いない。……といっても“バレれば”、の話だが。

クラスタは連合軍という名の反乱組織の上級幹部。それが捕まれば処刑されるだろう。死人に口なし。死ねばここで行われたことも言えない。つまり、拷問を行ったという事実がバレる事はない。

「し、知らないッ！ そんなの知らないッ！」

「ホオ、そうかい。オイ」

「はい、閣下」

ファルガ准将の一言で別の針が手渡される。今度は中指を掴む。クラスタは必死に指を握って刺されないようにする。が、しかし、腕力の少ない彼女と鍛えられた彼とでは力の差が有りすぎる。ほと

んど抵抗出来なかった。

「2本目、刺すよ？」

「グッ！ か、勝手にしろッ！！」

クラスタは目をつむり、叫ぶ。心臓が高鳴り、恐怖が精神を蝕^{むしば}んでいく。目をつむると何も見えない。今、針がどの位置にあるのか分からない。分からないから怖い。でも、目を開けるほうが怖かった。

鋭い刺激。それが来た瞬間、彼女はビクリと体を震わせる。いずれ来るとは分かっていた。分かっていたケドいざ来ると……

再び激しい痛みが襲う。針は彼女の爪と皮膚の間を突き進む。爪と皮膚が完全に分離するような激痛。今まで引っ付いていたモノが引き裂かれ、分化するような感覚。そのような感覚がクラスタを襲う。

「痛いッ！ 止めろオッ！」

「だったら本部要塞のある所を吐け」

「ウツクアッ！ 知らな……」

そう言いかけた途端、別の激痛が押し寄せる。突然、現れた激痛の原因は左人差し指に突き刺された針によるものだった。今回は爪と皮膚の間ではなく、そのまま上から突き刺した。ファルガ准将は骨を削るようにグリグリと回しながら力を入れて刺し込んでいく。

「ウアッ！ 止めてッ！」

「それはコッチのセリフだ。『ウアッ！ 止めてッ！ 秘密守るの

』」

「ングウッ！ バカに、して……！ 許さないッ！」

「その割にはさっきからやられっぱなしじゃないかね？」

そう言いながらファルガ准将は兵士の持っていた数本の針を取ると、箱の上に並べ、その内、一步を持つ。

「早く喋ったほうがいいんじゃないのか？ なア、オイ」

「ヒ、グッ！ 知らない…… 知らないッ！」

「ああ、そうかい。お前達、この女の口を塞げ」

「イエッサー」

1人の兵士がクラスタの口にボールギヤグ玉猿轡を入れ、紐を使い後頭部で縛る。ファルガ准将は全ての針を使うつもりだった。それが終わるまでボールギヤグは外さない。全ての指に針を刺し込んだ後にもう一度聞くつもりだった。

ボールギヤグで口を塞ぎ終わると、彼は持っていた針を握り、クラスタの親指を掴む。そして、針を爪と皮膚の間にねじ込んだ。

＊

針が全て使われ、クラスタの指は血で染まる。使われた針は抜き取られ、ボールギヤグは外される。拷問を受けさせられた彼女の顔は涙で濡れていた。

「ウ、グウ…… ウアッ！」

「どうだね？ そろそろ話す気になったかね？」

「ヒグッ、知ら、ない……」

クラスタの言葉にため息をつくファルガ准将。これだけ苦痛を与えれば口を割ると思っていた。だが、彼女の口からは“知らない”という言葉。期待を裏切られた気分だった。

「チッ！　続きは明日行う。それまでによく思い出すんだな。オイ」
「イエッサー」

側に控えていた兵士がクラスタの手首の拘束器具を外す。彼女は力なく、その場に倒れる。もう、抵抗する力も、立ち上がる力すら残されていなかった。

床から血の付いた箱を取り外し、ファルガ准将と兵士達は部屋から出て行く。後に残されたのはクラスタのみ。彼女は酷く傷つけられた自分の手を胸の前で弱く握る。

苦痛と恐怖が心を覆い、切り刻まれるような気分になる。捕まった時は、まさかこんな目に合わされるとは思ってた。なかった。

――拷問。明日も行われる、のか。

彼女の心に芽生えた恐怖心は時間と共に確実に大きくなっていった。

第3話 砕の試練

——苦しい、痛い……あの苦痛にまた襲われなければならないのか？

ロックされていたスライド式の扉の扉が開いた時、クラスタはそう心の中で思った。

「おはよう、お譲ちゃん。昨日の質問の答えを聞いていいかな？」

「……1つ聞いていいか？」

「いや、お前が聞くのかよ！ 逆だ！ 逆！」

「……お前達、政府の“望み”は何なんだ？」

そう聞くクラスタの目はまっすぐとファルガ准将を見ていた。

「俺達の望み？ それは勿論、世界の統治だ。世界を強い力で治め、いかなる敵が現れようとも無限の力で討ち滅ぼす。敵を倒し、全市民の生活を守る」

「……その考えが戦争を起こし、多くの市民を殺すハメになったんだな」

「ん？ 何だって？」

「……………」

「まあいい。話が逸れたな。今日こそ教えてもらうぞ。連合軍本部要塞の位置を！」

兵士が彼女を立たせ、別の兵士が傷ついた人差し指を握る。僅かに痛みが体を走る。

「……………！」

「さて、教えてもらおうかな。やれ！」

「イエッサー！」

「な、何を、……………ッ！！」

クラスタの顔が引きつる。歯を食い縛り、激痛に耐えようとする。数秒前に部屋に響き割った音。それは木の枝を折った時のような音に似ていた。音のした人差し指は異常な方向を向く。

彼女の人差し指は関節でへし折られていた。

「うッアッ！ グッ！ グウッ！！」

「暴れるな！ ええい、この女を押さえつけろ！」

あまりの激痛に暴れ、彼女の体を支える兵士を振り切り、逃げようとするクラスタ。だが、大して力もない彼女にそれは出来なかった。たちまち、床にうつ伏せに寝かされる。その背中を兵士達が膝で抑える。

「よし、次だ。お前達、しっかり抑えておけ」

「イエッサー」

「止め、てッ！」

再び不快な音が鳴り響く。太い枝を折ったような音。それに似た音。だが、その音はファルガ准将や兵士達の耳に入ることはなかった。何故なら彼女の悲鳴の方が大きかったからだ。

広い部屋に響くのは腹の底から上がる絶叫。そして次々と折られゆく指の骨の音。彼女は激痛に泣き叫ぶ。

「どうだ？ 喋る気になったかね？」

不気味な笑顔で答えを求めるファルガ准将。クラスタは激しく顔を左右に振り、拒否の意を示す。それを見たファルガ准将はニヤリ

と笑い、懷から大きなペンチを取り出す。それで彼女のへし折れた指を挟む。

「まだ言わないのか？ 早く喋った方が楽になるのになあ。もしかして喋ったら殺されると思っっているのか？ 用済みの人間として。もしそうなら心配するな。命だけは助けてやるよ。どうだ？ まあ、自由は無理だが」

クラスタは涙と汗でくしゃくしゃになった顔を激しく振る。そのせいで床に涙と汗が飛ぶ。

小さなため息。ファルガ准将は力を入れる。当然、ペンチを持った右手に、だ。鈍い音。破裂音のような音。硬い物が砕けたような音。それが鳴り響く。

「今度ばかりは早く喋った方がいいぞ。全ての指が砕かれたら……分かるよな？」

砕かれたらもう元には戻らない。もし、全ての指の骨を砕かれたら手は使い物にならなくなるだろう。今後、生きていく中で、ずっと。

クラスタは震えながらしばらく何の反応も示さなかった。が、再び顔を横に振った。

——教えない。絶対に、絶対に！

「そう、か。残念だよ。お前は自分の体も命も大切にしない愚か者だ」

別の指を挟むと、再びペンチを握る手に力が入る。そして、へし折られて内出血を起こしている指を一気に砕いた。それが終わると別の指を挟む。そして砕く。

何度か繰り返すうちにクラスタは叫ぶ。止めて、と。だが、その言葉を無視してファルガ准将は一本、また一本、と砕いていく。

——酷い……。やっぱり政府はこんな方法しか出来ない。力で解決することしか出来ない。

反乱が起きた時、政府総帥はすぐに反乱鎮圧軍と称して何十万という兵士とおびただしい軍用兵器を占領されたティトシティに向かわせた。そして、そこで大規模な爆撃を行い、市民も連合軍も無差別に殺しまくった。

そこで私の家族は死んだ。母と父。姉と弟。家族の一員として大切に育ててたペット。幼馴染の友人。告白してOKしてもらったばかりの……。全てが炎の中に消え去った。

私はその事件以来、国際政府を憎んだ。心に底から憎んだ。勿論、この戦争を引き起こした連合軍も。そんな時、連合軍のリーダーが私に会い、言った。

「ヨと共に世界を新たに生まれ変わらせよう。腐敗した国際政府を滅ぼし、安全で平和な国家を作ろう」

その男の素顔は分からなかった。黒い装甲服を着て、頭部はフードを被っている為、見えなかった。でも彼は言った。新たな国家を作ると。

私は彼の話に乗った。彼の話に乗り、連合軍幹部となれば家族や友人、“リユート”の仇が討てると思ったからだ。

でも、その為に私は多くの市民を殺した。いや、厳密には私が殺したワケじゃない。私の命令で部下が動き、殺したのだ。

ある時、自分のやっている事が怖くなった。命令を出す。それだけで人が死ぬ。家族や友人達を殺した政府関係者が死ぬのは平気だったが平和に暮らしているだけの市民が死ぬのはダメだった。絶えられなかった。自分もあの政府軍と同じ事をやっている。そう思う

と胸が張り裂けそうだった。

私は家族の仇を討てぬまま、政府を滅ぼせぬまま、連合軍を辞めた。地位も、おカネも、権限も、何もかも捨てて本部要塞から逃げた。

もう、ぐちゃぐちゃだった。暴力で解決する政府を憎んでいたのに、その暴力で解決しようとしている自分。深く考えた時、涙が止まらなかった。

連合軍は辞めた。が、私はもう市民にはなれない。連合軍“元”上級幹部として政府に追われ始めた。私の知っている事を求めて、政府軍は私を執拗に追った。

私を政府軍から守ってくれるモノは何もない。連合軍に所属していたときは部下や仲間である軍用兵器や兵士が守ってくれたが離脱した今、何もない。

逃げ続けてが結局捕まってしまった。そして、今、私は耐え難い苦痛を受けている。これは多くの市民を殺した私への罰なのだろうか……？

「よし、今日はここまでだ。さっさと話したほうが楽になるぞ」

ファルガ准将は気を失い倒れたクラスタに背を向け、部屋から出て行く。気絶した彼女の周囲には血と汗と涙が飛び散っていた。

第3話 砦の試練（後書き）

※リユートロシティに住む男性。クラスタの恋人。

第4話 炎の試練

夜が過ぎ、また朝がやって来る。それはクラスタの僅かな安らかな時間の終わりを告げるものであった。

クラスタの閉じ込められた部屋。その部屋のスライド式の扉が開かれ、アサルトライフルを携えた2名の兵士が入って来る。

「ファルガ准将の命令だ。来い！」

「……………」

クラスタはベッドからゆっくりとした動きで降り、兵士の後について行く。

部屋から出て、白い廊下を歩いて行く。その途中に窓があった。そこから見たのは高層ビルが立ち並ぶ首都グリードシティの街並み。雪が降り、アスファルトの地面は白く、一面は銀世界だった。

この窓から見える都会の景色から今、自分の閉じ込められている部屋は相当高い階にあるのだと分かる。

「オイ、立ち止まるな」

「……………」

兵士の声と共に再び歩き始める。やがて、歩き続けて数分。クラスタと兵士達はエレベーターに乗り込む。四方が透明なガラスになっているエレベーターだ。

そこからも都会の景色を見る事が出来る。さっき見たときと同じだった。一面が銀世界。真っ白な空からは絶えず雪が降り続ける。

エレベーターが下りる間、クラスタは遠く、戻ってくるこのなき過去を思い出す。

——家族達と造った雪だるま。友人達とお互い雪を投げて遊んだあの日。リュートと（その時はまだ友達として付き合っていたケド）一緒に見に行った氷の造形物。

もう、戻ってくることはない。時間も、家族も、友人も。あの空爆の炎によって消え去った。

「よし、降りろ」

クラスタは無言でエレベーターから降りる。兵士が先に降り、クラスタが後に続く。これからどこに連れて行かれるのであろうか？全く分からない。彼女の心に不安と恐怖が湧く。暴れて逃げ出した衝動に駆られる。

だが、左右に武器を持った2人の兵士。抵抗して暴れてもムダであろう。ここで暴れるよりかは大人しくして体力を温存しておいた方がよさそうだ。クラスタはそう考え、抵抗する考えをやめた。

【PXL-4 尋問部屋X】

プレートに尋問部屋Xと書かれた部屋。クラスタはそこに連行された。その部屋にいたのはファルガ准将と装甲服を着た4人の兵士達。

「やア、待っていたぞ」

「今日は何をする気だ？」

「フッフッフ、今日こそ教えて貰おうと思ってな」

鋭い視線を感じる。ファルガ准将のどす黒い視線がクラスタに刺さる。自分と違う者は敵。敵には何をしてでも構わない。例え、敵な

ら女性でも、子供でも傷つけて壊す。そうしてもいい。

この場合の敵は国際政府に逆らい反逆を起こした連合軍。国際政府の掲げる絶対的な平和と正義。それが分からない者は敵。何をしても構わない――

「オイ」

「イエッサー」

クラスタの左右にいた兵士が彼女の腕を掴み、部屋の奥へと連れて行く。扉は閉じられ、部屋は密室となる。部屋は誰にも見られなくなる。関係者以外……

部屋の奥に連れて行かれた彼女は壁に向かい合わせにさせられる。そして、両手足を壁に取り付けられていた拘束器具で動けないように固定させられる。

「さて、そろそろ強がるのはやめて連合軍本部要塞の位置を教えるんだな」

「言うなら指を碎かれる前に言ったさ。私はお前たち政府に、多数を守ることにしか知らない政府に協力する気はない！」

クラスタは拳を握ろうとした。が、その瞬間、痛みが体を駆け巡る。碎かれた指から、だ。彼女はその指を見、目を伏せる。

――もうこの指は戻らない。ずっと、一生このままなんだ。

「はぁ？ 多数の人間を守るのは当たり前だろうが。少数は捨てて多数を守る。死んだ少数はやむ得ない犠牲だ」

「……好きにしろッ！ 私は、私は絶対に政府に協力はしない！」

ファルガ准将は顎で合図する。1人の兵士が鉄の棒を持って進み出る。その鉄の棒は先端が曲がり赤く、いや黄色く光り、強い熱を

発していた。拷問用の器具、焼きごてだ。

「クッ……」

「フッフッフ、微妙に体が震えているぞ。もう限界なんじゃないのかね？」

「そ、そんな事、ない！」

ファルガ准将や兵士らには見えなかったがクラスタの目から一筋の涙が頬を伝わった。心が切り裂かれるような恐怖。目を開けても見えるのは壁だけ。瞬れば暗闇。今、ファルガ准将が何をしようとしているのか彼女にはわからなかった。分からないから余計に怖かった。

「やれ！」

黄色に光る焼きごてを持った兵士は無言で頷き、クラスタに近づく。そして、それを彼女の背中に押し付けた。

「……………！」

服の上から押し付けられた焼きごて。一瞬、冷たいモノが当たったかのような錯覚を起こす。だが、すぐに熱を感じた。それも異常な程の。

「ああ、本部要塞の位置が分かったら叫んでくれ。そしたらすぐをやめてやる」

「ふギィッ！ うグッ！ ……………ッ！」

クラスタは必死に歯を食いしばり、叫ぶのを我慢する。その口から顎を伝い、血が流れる。唇をあまりに強く噛みすぎ、出血したの

だ。

押し付けられた部分の服は一瞬で灰となり、皮膚が焼かれ、体液が熱で蒸発し、白い煙が僅かながらに上がる。

焼きごてはしばらくの間押し付けられるとそれは離され、また別の焼きごてを押し当てられる。時間と共に火傷の痕は増えていき、クラスタの肉体と精神は傷つけられる。

「うッアッ！ もう、やめて……！ グ、ギッ！」

「おお、止めてやるとも。連合軍の本部要塞の位置を言ったらな」

そんなやり取りが何度か交わされた後、兵士の1人がファルガ准将に耳打ちする。それを聞いたファルガ准将は手で焼きごてを押し付ける兵士を制止する。

「今日はここまでだ。クラスタを離せ」

「イエッサー」

数人の兵士がクラスタの手足に取り付けられた枷を外す。彼女はその場に倒れこむ。

「う、ク…… うう、ク、う」

「……泣いている暇があったら本部要塞の位置を喋るんだな」

「う、知ら、ない。泣い、てない、うック……」

そう言う彼女の声に力はない。もはや彼女の体力も精神も限界だった。それが壊れるのは時間の問題だろう。

2人の兵士が彼女の腕を掴み、引きずるようにして部屋から連れ出す。その後には血だけが残っていた。

「……アレでいいのか？」

クラスタが連れ出された後、ファルガ准将が言った。言った相手はさつきファルガ准将に耳打ちをした兵士だ。彼は政府軍の特殊部隊である医療部隊に所属する兵士だった。いや、軍医だった。

「あれ以上やると死んでしまう可能性がありますので……」
「ふむ、そうか」

その言葉に素直に従うファルガ准将。死んでしまっただけは元も子もないと医療関係者を1人準備していたのだ。

第5話 水の試練

【軍事総本部 とある建物】

ファルガ准将と兵士たちが歩く。彼らの内、3人はアサルトライフルを、6人は大型の水槽を、1人は白い布を持っていた。彼らが目指す場所はクラスタを閉じ込めた部屋。再び彼女に地獄が訪れる……

扉の上で点灯するランプが赤から緑に変わり、スライド式の扉が左右に開かれる。その部屋はクラスタが閉じ込められている部屋だった。

「……………!」

険しくなるクラスタの表情。絶望と恐怖に満ちた表情。昨日の拷問を思い出し、体が小刻みに震える。

「やア、元気だったかな？」

ファルガ准将の言葉に一瞬、彼を睨みつけるクラスタ。元気なハズがない。ここ数日の拷問のおかげで。だが、相手を怒らせればさらに酷い目に合わされかねない。彼女はそう考え、怒鳴りたい衝動を何とか抑える。

「……………」

「ムシか。まあいい。今日は、じゃなくて今日こそは喋ってもらおうぞ」

「また拷問、か。そんな事を平気でやってける連中が政府にいるなんて……………」

クラスタは強く口を噛み締める。それは拷問に対する恐怖からなのか、政府に対する恨みからなのか、それとも両方だろうか……？

「……お前たち連合軍が戦争を起こさなければ済んだ話だろうが。戦争を起こして罪なき市民が多く死んだ。悪いのは全部君たちだ」

「黙れ！ 2年前のティトシティの戦いの時、政府軍は市民も連合軍の人間も一緒に殺した！ お前ら政府は今までため込んだ軍事力を使いたいが為に話し合いもせずに軍を……！ 私の家族を、リユークを！」

臨海都市ティトシティ。今は廃墟となった都市。大陸の東に位置し、多くの市民が生活を営んでいた。だが、それはある日消える。

連合軍と呼ばれる反政府組織がある日突然、ティトシティを占拠したのだ。国際政府は精鋭軍と強大な軍事力を誇る特殊軍に命令してティトシティを破壊した。大規模な空爆で。占拠した連合軍も人質となっていた市民も……

連合軍はその少し前、とある要求をしていた。無論、国際政府に対して。その要求とは“テトラルシティ消滅の真相を世界に公表しろ”という内容だった。しかし、政府はその要求を黙殺。大規模な空爆作戦、“ティトシティ除去計画”を実行したのだ。

「国際政府は許さないのだ。お前たちみたいなキチガイ集団を。ワケ分からぬアホを、な」

「だから、政府と一緒に市民も殺したのか」

「……僅かな犠牲は仕方なし。ティトシティの犠牲で戦争が抑えられるならな」

「残念だったな。ティトシティは消えたが戦争は世界中に広まった。いや、ティトシティの犠牲の“おかげ”、で」

あのティトシティの事件以来、政府の信頼は地に落ちた。市民の底知れない恐怖が爆発した。

実は“除去計画”が行われたのは今回が初めてではなかった。12年間のテトラルシティ除去計画。5年前のグランドシティ除去計画。そして2年前のティトシティ除去計画。

短い期間に連続して起きた3つの除去計画は市民に大きな恐怖を与えた。次は我が身の番では？ 国際政府の強大な軍事力にいつか支配されるのでは？ 今立ち上がらないと取り返しのない事になるのでは？ 今の平和な生活が奪われ、奴隷のように扱われるのでは？ そう考えた市民は次々と連合軍に入ってしまった。

こうして市民の大規模な決起と、もともと強大な軍事力を隠し持っていた連合軍により戦争は止まることを知らぬ最悪の世界大戦へと発展していったのだ。

だが、戦争を終わらせる方法はある。国際政府が倒れるか、連合軍が倒れるか、だ。そしてお互いの本拠地を取れば戦争に王手を打ったのも同然であった。

「ああ、確かにそうだな。バカな市民のおかげで収まるものも収まらんわ。ここは早々に本拠地を取らないと、な。オイ、始めるぞ」
「拷問……！ こんな方法を使うなんて…… こんな方法しか使えない政府なんて……！」

数人の兵士がクラスタを手足を抑え、無理やり、上半身を起こさせる。そして、大きな水槽を持って来る。そこにはホースが取り付けられていた。

「喋る気は？」

「な、ないッ！」

「あっそ」

ファルガ准将は手で合図を送る。数人の兵士が無言で頷くと青色のホースの口をクラスタの口に入れ込む。それだけではなく、別の兵士が2メートル程の白い結び目のついた布をも口に入れ込む。といっても布全部を入れられたワケではなく、入れられたのはほんの一部、布の端だけであった。残りはまだ彼女の口から出ていた。彼女は抵抗しようとするが手足は抑えられ、頭も掴まれている為、抵抗らしい抵抗はできなかった。

「んぐぐ……」

「本部の場所は？」

クラスタは無言で睨む。――教えない。お前たち政府に教えることなんてない。

それを感じ取ったファルガ准将は「やれ」とだけ言った。

兵士の1人がホースを持ち、別の兵士が布を持つ。拷問のようだが、一体どのような拷問が行われるのだろうか？ クラスタには理解できなかった。

やがて兵士の1人が蛇口のコックを捻る。ホースの先端から勢いよく水が出る。驚いたクラスタはホースから出てくる水を飲み込んでしまう。その時、水と共に口の中に入れられた布も一緒に入ってきた。

「……………！」

「ムリしても仕方ないぜ？ 飲み込んだ方が楽になるんじゃないか？」

のどの奥にへばりつく布。飲み込みきれないもどかしさ。次々と口に注ぎ込まれる大量の水。クラスタは少しずつ、少しずつ飲み込んでしまう。水と結び目のついた布を。

「む、ぐッ」

「おっと、息は出来たら口でお願いしますよっと」
「……………！」

ファルガ准将はクラスタの鼻をつまむ。鼻をつままれたら息が出来ない。口でするしかない。が、しかし、その口は大量の水が絶えず注ぎこまれている為、呼吸が出来ない。

「……………！！……………！！」

次第に苦しくなってくる。呼吸が出来ず、酸素が足りなくなり、頭がズキズキし、目の前が暗くなる。

クラスタはつい、口で呼吸しようと勢いよく飲み込んでしまう。
水と布を……

「よし、止めろ」

「イエッサー」

その言葉に従い兵士達は放水を止め、ホースを口から引き抜く。
クラスタは荒い息をしながら呼吸をする。今までできなかった分を今しているのだ。そんな彼女にファルガ准将は問う。

「本部要塞の位置は？」

「うぐぐ……」

苦しそうなうめき声を上げるクラスタ。だがその目はファルガ准将を睨みつけ、絶対に教えないという彼女の強い意志と政府に対する憎しみが感じられた。

ファルガ准将のドス黒い心が動いた。

「やれ」

「……………！ イエッサー！」

「う、ぐ…………？」

兵士の1人が、結び目のついた布を持つ兵士が、クラスタの口の奥にまで入り込んだその布を持つ兵士がそう言った。命令実行の意を示す事を。

「……………！！」

叫び声が上がる。激痛を与えられた者が上げる叫び声。身体の苦痛を表す声が…………

クラスタの口から真っ赤に染まった布が、兵士によって無理やり引き出された布がそこにあった。結び目が内臓を傷つけ、彼女に激痛を与えたのだ。

水と共に飲み込んだ布には結び目。無理やり引っ張り出されるときに食道の粘膜が傷つき、抉れたのだ。その部分から血が出て、白かった布を真っ赤に染めた。

「うッ！ ギッ！ クッ！ キャアアアア！！」

空気を切り裂く悲鳴。つんざく悲鳴。クラスタは口から鮮血を飛びしながら絶叫した。我慢強い彼女でもこの拷問には耐えられなかった。彼女の目からは涙が頬を伝っていた。

だが、そんな彼女をムシして再びホースが入れられる。

「さて、傷ついた内臓に水をぶっかけたらどうなるかな？」

「んグッ！ ググッ！」

クラスタは弱く首を左右に振る。その顔は苦痛と恐怖に歪んでい

た。

「そうか、なら教えてくれるかな？」

「……………」

クラスタは何も言わない。ガクガクと震えながら怯えた表情でファルガ准将を見ていた。

「…………言う気はないのか？」

「……………」

「そうか、残念だよ。やれ」

「イエッサー」

ファルガ准将の命令で兵士の1人が水を注ぐ為のコックを捻った

…………

第6話 力の試練

白い部屋は赤く染まる。辺り一帯に四散した鮮血。それは異様な光景を生み出していた。部屋に充満するニオイは鉄のニオイ。血のニオイだ。

クラスタはもう瀕死の状態に近かった。度重なる拷問で肉体は限界に。精神もまた同じく限界だった。もう、彼女に希望はなかった。ベッドに横たわり天井を見つめるその目に光はない。

「クラスタ、時間だ」

気が付けばいる兵士。クラスタはそれが悪魔に見えた。いつの間に入ってきたのだろうか？ ボロボロになった彼女にそれは分からない。

半ば強制的にベッドから引きずり降ろされ、彼女は不気味な部屋を出る。出る直前、虚ろな目でその部屋を見る彼女。血、血、血。茶色くなった血。それが至る所に。

兵士らが彼女を引きずるようにして連れ出す。自分が多くの拷問をされた部屋。その部屋の最後に見た光景がこれであった。

*

【軍事総本部 尋問部屋】

尋問部屋は今までクラスタがいた部屋とは違い、暗く石造りとすぐにわかる部屋だった。

この部屋に連行されて来た彼女はベッドに寝かされ、四肢を金属で固定される。また左右の手は拳を作らされ、その拳をも金属製の器具で締められる。

「もうそろそろ聞き飽きたかも知れないが本部要塞の位置はどこだ？」

「……………」

「そうか。まだ黙んまりかい」

ファルガ准将は顎で合図し、自分は近くの椅子に座る。

合図を受けた兵士は無数にあるボタンの幾つかを押し、何らかの器具を操作する。

「さてさて、今日は…… まあいいや。せいぜい耐えるんだな。今日という一日を。お前の最後…… いやなんでもない」
「……………」

ファルガ准将の言葉に違和感を覚えながらもクラスタは内心、絶対に耐えてみせるという決心をする。どんな拷問にも耐えて……

——耐えてどうすんの？ 耐えてればいいのか？ 耐えてればいつか終わるのか？ ……私が本拠地を言う以外にこの地獄を終わらせる方法はあるのか？

そう考えていると不意に右の拳を締め付ける金属製の拘束具が軸回転を始める。その方向はクラスタから見て右方向に動いていた。

「え？ ………………！」

「もう説明しても仕方がないが当然、回り続ければ腕が付け根から……

… ああ、もう片方もやらんとな」

その言葉を聞いた兵士は操作パネルのボタンを押す。すると左の拳を締める拘束具も動き始めた。軸回転を続け、次第に腕に苦痛が走る。

「クッ！ 腕が……！」

回転を続け、最初天井を向いていたのは手の平。しかし、今は手の甲。このまま回転が進めば再び手の平が天井を向く。だが人間、自分でそこまで向ける事は出来ない。それを無理やり向けたらどうなるか……？

「ひッグッ！ 痛い！」

「本部要塞の位置を言え」

「イヤだ！」

そう言っている間にも回転は続き、もはや360度回っていた。つまり手の平が天井を向いていた。激痛とまではいかないが少々之苦痛はあった。しかし回転は続く。

「うッグッギッ！」

「……どこ？」

ファルガ准将はもはや諦めていた。どれほど酷い拷問にかけようとも彼女は口を割らない。そう思っていた。

一方、回転は続きクラスタの肩の関節は外れる。それでも回転が止められることはなかった。手の平が天井を向き、甲が向き、また平が向き……

彼女の白い肩の肌はどす黒く染まる。内出血を起こしているのだろう。

「ウワァァ！ 肩が、千切れる！ 止めて……！！！」

「止める方法ぐらいもう知ってるだろ？」

「……………！」

連合軍本部要塞の位置を教える。それしか救済の道はない。でもクラスタは言いたくない。

クラスタの肩の筋肉が裂け、腱は引き千切れていく。だがそれでも止めては貰えない。彼女は今までにあった事なき激痛を受け、奇声に近い悲鳴を上げる。

「そろそろ骨が逝くかな？ マジで言えよ」

そんなファルガ准将の声も今の彼女には届かない。例え届いても変わらないと思うが。

やがて回転が止められる。だが彼女の腕はもう二度と元に戻せないだろう。それはつまり、二度と動かせない事をも意味していた。

「次だ」

「イエッサー」

1人の兵士が試験管を持って来る。その中には何らかの液体が入っていた。その試験管を受け取るファルガ准将。彼はそれを持ってクラスタの近くにまで歩み寄る。

「どうせ、言わないんだろう？」

「よ、よく分かってる、じゃん……」

「ああ、分かっていると。イカレ頭が！」

試験管を傾け、液体を垂らす。それが落ちた先はさっきの拷問でズタズタになったクラスタの肩だった。落ちた瞬間、焼けるような激痛が走る。落ちた所からは白い煙が上がる。

「がッハッ……！」

「今、お前の両肩に垂らした液体は強力な硫酸だ」

その硫酸が落ちた部分を指で触れるファルガ准将。彼は手に特殊な手袋をしている為、硫酸によってとかされない。

「最後にもう一度だけ聞くが本部の位置は？」

「うア、グッ！ リュート、助け、て…… リュー、ト」

「リュート？ ああ、いい事を思いついたぞ。君が本部要塞の位置を喋らないのならそのリュートを拷問しよう。フッフ、国際政府の強大さは知っているだろ？ 民間人1人消すことなど簡単だ」

その瞬間クラスタの瞳に憎悪の炎が灯り、今までに見せなかったほどの鋭い視線でファルガ准将を睨む。その視線に全員が一瞬怯んだほどだ。

「リュートは、ティトシティで死んだ！ お前ら政府の、せいで！
うッグアッ！」

一瞬怯んだファルガ准将だったがすぐにいつもの表情に戻る。またクラスタも限界だった。怒りを露わにしたがそれが最後の力だった。肉体的にも精神的にも壊れるのは近かった。

「そうか、死んだのか。それは残念だったな」

ファルガ准将は少し間を開けて言った。

「お前も一緒に所に送ってやるよ。今から、な」

第7話 死の試練

【軍事総本部 処刑場】

雪が降る政府首都グリードシティ。大陸の北方に建てられたこの都市は冬の寒さは厳しい。今日もまた雪が降り、地面を、空を、人の息を白くする。

高い塀で囲まれた軍事総本部の処刑場。数人の人間が歩いていた。クラスタ、ファルガ准将、兵士……

「よし、ここだ」

「イエッサー」

兵士が彼女を柱に縛り付ける。度重なる拷問でボロボロになった服と体。冷たさが体に凍みる。彼女の目に光はない。

風が吹き、骨身に凍みる。その風の音は今亡き家族や友人、そしてリュートの声に聞こえた。

「フッフ、お前達が戦争を起こさなければこうならなかっただろうにな」

「……………」

「戦争は絶対悪だ。我々国際政府が必死に守って来た平和を踏みこじる最低な行為だ」

「……暴力を暴力で返す政府に言われたくない」

「我々は今後も全力で平和を脅かす者達を討つ。許しはしないさ」

その言葉を聞いた時、クラスタは小さな声で言った。

——人類の運命が見えた。

その言葉は誰一人にも聞こえなかったが。

「最後にもう一度だけ聞く。……いや、何でもないわ。これでお別れだ。クラスタ」

ファルガ准将は手で合図する。それを見たその兵士は無言で頷く。その手にはライフルが握られていた。

ライフルの銃口がクラスタに向けられる。ファルガ准将は彼女に背を向け、歩き出す。

「……やれ」

ライフルを持った兵士はクラスタの頭に狙いを定め――……

【軍事総本部 特殊部隊長官室】

ファルガ准将は特殊部隊の長官レイズに報告を終え、部屋を出ていく。

その部屋から見えるのは雪化粧をした軍事総本部。

「命令を受けた迎撃・駆逐部隊員はレベル28へ！ 特務・掃討・強襲部隊はレベル46へ！」

今日も大型の飛空艇が飛んでいく。明日も飛ぶ。明後日も飛ぶだろう。世界各地に兵士を送り込む為に。

“戦争は絶対悪である” “正義を死守する” “もう一度国際政府の平和を蘇らす為に”

国際政府は戦う。平和の為に。戦争を終わらせるために戦争をする。今日も、明日も、明後日も。

「ホープシティ陥落！ 警備軍精鋭第7E部隊と衛生731部隊は援軍として……」

戦争は激化する

大陸の全てが戦場となり、

多くの人が行き場を失う

彼らは暴徒となる

生きるために

教育と作られた常識など何の意味も成さない

勝てば官軍

国際政府と連合軍は“正義”となる為に勝たねばならない

邪魔な市民など目には入らない

次第に勝利だけを求めるようになる

戦争は激化する

そして人類の運命は“終極”という方向に流れる――……

『グリッドシティ★残酷の拷問 完結』

あとがき

どうも、こんにちは

黒夜風です

あとがきのコーナーです☆

まず最初に拙作「グリードシティ★残酷の拷問」をお読み頂き有難う御座います

もう知っていると思いますがこの作品は「夏のホラー2011」夏の夜には怪談を」というなろうの公式企画で投稿した作品です

今年は“幽霊”“怨念”“災害（Ⅱ地震・津波・ウイルスなど）”を使わずにホラーを書く、という事を目標に書きました

かなり難しかったですW

今作で一番神経を使ったのは“描写”ですね

どうやって書いたら分かりやすく伝わるのか？ この動きはどうやって書けばいいのか、などかなり大変でした

でも書けてよかったです☆

さて、作中の拷問法は実際にあった拷問法＋作者の想像です

第3話の拷問の元ネタは「親指詰め」です

作中ではペンチを使っていますが実際には「親指締め器」と呼ばれる拷問具を使ったそうです

第4話のはそのまんま実在した拷問です

第5話の拷問もまた実在した拷問です。今作の拷問群の中で個人的にはこれが一番怖いなぁと思ってますw

第2・6話の拷問は作者の想像です。でも、もしかしたらあるかも知れませんね

この他にも色々な拷問がありましたが、あまりにも過激な内容になりそうでしたので止めておきました

夏ホラー、R-18はNGなんでw

さて、こんなグロ描写満載の小説に付き合って頂いて有難う御座いました！

少しでも怖いと感じて頂けたら幸いです

2011／08／08 by 黒夜風

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6034v/>

グリードシティ★残酷の拷問

2011年9月26日23時30分発行